

日本分子生物学会 キャリアパス委員会主催 ランチョンセミナー2019 それでいいのか？研究室の選び方

- 日 時：2019年12月3日（火）11：45～13：00
- 会 場：福岡国際会議場2階203
- 司 会：花嶋かりな（早稲田大学教育・総合科学学術院）
（参加者：約270名）

○司会（花嶋かりな） それでは定刻になりましたので、キャリアパス委員会主催ランチョンセミナー2019「それでいいのか？研究室の選び方」を始めたいと思います。司会進行は、分子生物学会キャリアパス委員、早稲田大学の花嶋が務めます。どうぞよろしく願いいたします。

今回の企画では、今年8月に実施した事前アンケートで、学部学生、大学院生、ポスドク、non-PI研究者、PI研究者などの異なる立場から、「どのように研究室を選んだか」「研究室はどうあるべきか」「理想的なポストは」「理想のスタッフ、学生とは」などについてそれぞれの立場から提供いただいた情報をもとに、イマドキの理想の研究室について皆さんと一緒に考えたいと思います。

それではまず、イントロダクションとして、事前アンケートの結果から見ていきたいと思います。入口でお配りしたこちらの資料をご参照ください。

では、最初のスライドをお願いします。今回、事前アンケートの回答者数が866件と、例年に増して多くの回答をいただきました。その内訳は、学生が252人と最も多く、non-PIあるいはPIの方々もそれぞれ200人を超えていて、こちらのトピックに関する皆さんの関心の大きさがうかがえると思います。

次のスライドをお願いします。最初に、こちらの「大学院の時の研究室を選ぶにあたり、最も大きな決め手になったのは？」ですが、「研究内容」が一番重要な決め手ということで、これは皆さん一致していると思います。それ以外では、「PIのキャラクター（性格・個性）」とか「研究室の雰囲気」ということも重要であると寄せられています。また、この右の端に幾つかお寄せいただいたコメントを挙げています。例えば「大学院進学を考えている学生にとっては、学部生時代にどの研究室を選ぶかは非常に重要。自分に合わない研究室に入ってしまった場合は、諦めてずっとそこにいるのではなく、進学の段階で他の大学や研究室を選ぶことも考えた方がよい。」というコメントをいただいております。

では、次のスライドをお願いします。こちらは、今度、職制別に見ていただくといいと思いますが、「現在所属している研究室を選ぶにあたり、最も大きな決め手になったのは？」。「研究内容」以外では「PIのキャラクター」や「研究室の雰囲気」が挙げられているのですが、学生、ポスドク、non-PIの方は、まず学生さんは「研究室の雰囲気」を重視するという傾向が見られています。また、PIの方では「研究分野のマッチング、研究環境や設備」が重要であると述べられています。

では、次のスライドをお願いします。先ほどは最も重要な判断材料だったのですが、その複数の回答としてどのような材料を決め手としたか。「研究内容」以外で、まず「PIのキャラクター」、「研究室の雰囲気」、また「研究室の業績」あるいは「研究費」、「研究室で使う生物種」、あるいは「研究機器の充実度」といった研究の設備や環境に関する選択肢が判断材料となるという回答が寄せられています。

次のスライドをお願いします。PI以外の回答者が「現在の研究室選びの際に重要な判断材料とした」とものとPIが「大学院生・若手研究者に重要な判断材料とするよう助言する」ものを比較したいと思います。「研究内容が重要」であるということは、両方とも一致しているのですが、PI自身がその「PIの

キャラクター」を重視すべきであると述べられています。それ以外では、「研究室の雰囲気」や「研究室の業績」や「研究費」も参考にしたほうがよいという結果が得られています。

次のスライドをお願いします。「次に研究室を移るなら前回とは違う視点で選ぶ」と回答したポスドク・non-PI が研究室選びで「最も大きな決め手」とみなすものは、どう変化したか。上のポスドクを見ていただきますと、ブルーが現在の研究室で、オレンジが次の研究室を選ぶにあたり重要視する点ということで、現在の研究室は「研究内容」で選んだ。しかしながら、次の研究室を選ぶのであれば「PI のキャラクター」を重視するという結果が寄せられています。下の non-PI ですが、「PI のキャラクター」以外にもその他の回答が寄せられていて、「現在の研究室はどうにか得ることができた職であり、選択の余地はなかった」という回答が多数ありました。次の研究室を選ぶにあたっては、ほぼ全員が「PI になれるかどうか」を指標とする。すなわち、この研究室選びがキャリアの形成にあたって非常に重要な点であるということがうかがえると思います。

では、次のスライドをお願いします。具体的に「研究室の学生・スタッフからみた、上司・ボス (PI) の好きな点・不満な点」について見ていきたいと思います。好きな点については、「頭が良い、能力が高い」、「Discussion にとことん付き合ってくれる」というものが上位を占めています。不満な点については、「特に不満はない」というのが一番ではあるのですが、「多忙すぎる」、あるいは少数派ですが、この項目にある幾つかの不満点が挙げられていますので、PI の方々はぜひこれを参考にしてください。

下のほうで、今度は「PI のほうは研究室の学生・スタッフをどう思っている？」ということについて、こちら「不満はない」が上位ですが、その次に不満点の第 1 位が「ギラツキが少ない」、2 番目が「研究室に来て研究をしない」とあります。ただ、右のコメントに寄せられていますとおり、「いわゆる『ブラック研究室』と言われていても、中の人たちが楽しそうに文句を言っているラボは良いラボだと思います。(50 代・大学 PI)」というコメントもあります。

次のスライドをお願いします。「夜間土日祝日の研究についてどう思う?」。各職位とも一番多いのが「自主的に行う場合は良いが強制されるべきではない」。コメントに「夜間は事故の可能性があり、極力避けるべき。時間がないなら朝早く来て始めるほうがいい。研究時間が長いこと、研究室の滞在時間が長いことは、業績とは無関係。むしろ時間効率の悪さをさらけ出している。」という 40 代 PI のコメントもあれば、「正月は休むと言っていましたが、もう 2 日です。いつから研究室に来るのですか?」という 50 代の大学 PI。このあたりは、夜間土日祝日の研究について PI の中でも認識の違いが表れていると思います。

次のスライドをお願いします。研究の技術指導に関して言えば、「PI 以外の上司」が最も多いのですが、研究の方針・方向性の指導は「PI」にしてもらうということが最も多く回答が寄せられています。それから、「ボス、PI に求めるものは?」ということに関しては、「研究の助言」が圧倒的に多く、コメントの中で「サイエンスへの情熱とバランス」、あるいは「science が好きであること」というコメントが寄せられています。

次のスライドをお願いします。実際に研究室に入って性格が変わったかどうかということですが、左側のピンクのほう「PI になってから性格が変わったことはあるか」という設問に対して、「寛容になった、辛抱強くなった」が最も上位を占めています。ただ、下の最後のコメントにもありますように、「研究室も生き物のようなもので、あなたが入ったことによって研究室自体が変わる(変わってしまうし、変えることもできる)ことを認識したらよいと思う。」という、40 代・大学 PI からのコメントが寄せられています。

次のスライドをお願いします。「今の職の期間（学生は大学院時代）で研究に求めることは？」、これはPI以外に対する設問ですが、「知識・技術・ロジックの習得など研究者としての成長」が多いようです。この右下にコメントが寄せられていますが、例えば「…厳しすぎない風土は大切だが、容認しすぎる風土も危険。最近では修士卒で出て行く人が多いので就活の雰囲気にも呑まれる傾向もある。修士までであつてもしっかり研究をしたいなら、博士以上、そしてできればポストドク等のメンバーがいるラボの方が刺激を受けやすいと思う。」という non-PI のコメント、あるいは「研究を楽しんでほしい。」という 40代あるいは50代の大学PIから多くのコメントが寄せられています。

次のスライドをお願いします。具体的にラボ内での交流についてですが、「学生、スタッフがPIとランチを食べたい頻度と、実際にPIが学生、スタッフとランチを食べている頻度」。いずれも学生さんの場合毎日ということはないのですが、月に1、2回程度だったらPIとランチを食べたい。実際にPIのほうもそれに近い、あるいはもう少し低頻度でランチを食べていることがわかると思います。

次のスライドをお願いします。もうちょっと具体的なところでは、「学生、スタッフとPIのデスクが同じ部屋にあるのはお互いにどう思うか」。「気にしない」という回答があるのですが、特に学生、スタッフの回答、ブルーの所を見ていただくと、「気にしない」派、「絶対いや」派、中途半端に「少しいや」はあまりなくて、嫌いなタイプと気にしないタイプに分かれるのが出てくると思います。

次のスライドをお願いします。「ラボのイベント（飲み会やラボ旅行など）があるのはどう思うか」。これについては、学生、スタッフ（PI以外）の方々、あるいはPIのほうも「少し嬉しい／どちらかというで開催したい」という回答が一番多かったです。中には、こちらのコメントにありますとおり、「有志で開催してもらい、私は福澤諭吉に代理参加させる。」という40代・大学PI。あるいは「研究室を超えた飲み会が定期的にあると研究棟の雰囲気が良くなるので、研究室（PI）同士の仲が良いか悪いかっていうのは重要ではないか。」、これは大学院の修士の学生さんの意見です。

次のスライドをお願いします。今回アンケート設問ということで多数のコメントをいただいたのですが、こちらのほうで一部例としてリストしていますので、ぜひこちらのアンケート結果を参考にさせていただきたいと思います。また、本日はケータイゴングを使い、会場からのさまざまなコメントを拾って、パネルディスカッションの形で議論をしたいと思いますので、本日もお手元の携帯電話でコメントの投稿をよろしく願いいたします。

それでは、早速パネルディスカッションに入っていきたいと思います。パネリストの皆さんはご登壇をお願いいたします。

今年も、ケータイゴングを利用したパネルディスカッションを行います。お配りしたこの緑の紙、アンケート用紙の右上にあるQRコードかこちらのURLからアクセスできますので、ご準備をお願いいたします。皆さんと意見を交換しながら、双方向な議論ができればよいと思っております。

早速コメントが入ってきております。今準備をしている段階でどんどんアンケートの設問に答えていただければと思います。よろしいでしょうか。

今年のキャリアパス委員、パネリストの皆さんはこちらのメンバーです。では、ステージに向かって右から、木村先生より簡単な自己紹介をお願いいたします。

○木村宏 東京工業大学の木村です。たぶん去年のランチに参加した人はあまりいないと思いますが、実は去年、キャリアパス委員の引退宣言をしたのですが、実はもう1期あると言われて、また今年も参加しています。本来はここに胡桃坂キャリアパス委員長が座る予定だったのですけれども、ちよっ

と事情で、今回は分子生物学会の年会に来られないということで代わりにピンチヒッターとして座らせていただいています。よろしくお願いします。

○來生江利子 第一三共の來生と申します。よろしくお願いいたします。今回で3年目のキャリアパス委員となります。私はアカデミアのほうで日本の大学院を出ましたのち、アメリカの東海岸のNIHに留学しまして、その後西海岸のスタンフォード大学に行き、8年ちょっとアメリカで過ごしたのち、縁がありまして、今、この第一三共で研究開発を行っております。もともとバックグラウンドは分子生物学になります。委員の中でのキャリアとしては異色ですが、来年で第一三共10年目になります。まさかこんなに長く企業に勤められるとは思わなかったのですが、両方の視点で今回はお話ができたと思っています。よろしくお願いいたします。

○鈴木淳史 九州大学生体防御医学研究所の鈴木と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。まずは皆様、福岡にようこそお越しくださいました。ぜひおいしいラーメンなど食べて、福岡の楽しい思い出とともに安全にお帰りいただければと思います。研究室を主宰する身としましては、このテーマは本当に諸刃の剣というか、コメントすることが自分を苦しめるのではないかというふうにも考えたのですが、ここでは腹を割ってというか、それでもたぶん少し保身になると思いますが、皆さんと議論をして若い人のために何かアドバイスができればと思っていますので、よろしくお願いします。

○加納純子 大阪大学の加納です。私も小さなラボのPIとして、学生やポストクの皆さんがいかにしてラボを選ぼうとしているかということを知ることはとても死活問題で、今日はここにいますけれども、自分自身、学んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○石谷太 大阪大学・群馬大学の石谷と申します。どうぞよろしくお願いします。僕はしゃべりが下手なので、本当にここに座っていていいのか、いまだに悩んでいます。私はこれまで13年間PIをやってきましたが、未熟な状態でスタートでしたので失敗のフルコースを味わってきましたし、現在も試行錯誤でいろいろやっております。今回のランチョンセミナーはいろいろな立場の方々からのお話が聞ける学びのチャンスだと思っていますので、ぜひ勉強したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。それでは最初の設問に行きたいと思います。皆さん、ケータイゴングのご準備はよろしいでしょうか。先ほどお知らせしましたように、こちらにも表示されていますが、アンケート用紙にあるQRコードかURLからアクセスができますので、まだ設問に回答されていない方はどんどん入力をしていってください。設問一覧の一番下からコメントを投稿していただけるようになっていきますので、それぞれの設問に関するコメントをお寄せください。順次こちらの正面スクリーンに表示していきたいと思っています。

それでは、まず練習設問として参加者の属性からお答えください。右手のスクリーンに挙がってきています。トピックもあってか、修士の学生さんが一番多いですね。学部学生さんも結構いらっしゃいますけれども、それ以外ではポストク、助教、講師、准教授等の非PI職の方々。PI職の方々も今のところ14名、あと企業の方も1名いらっしゃいます。皆さん、こちらのケータイゴングのほうにお寄せください。PI (Principal Investigator) というのは研究室主宰者のことを表しています。人数が増えて

いて、修士と博士の方が同じくらい参加していただいていると思います。どうもありがとうございます。

それでは、最初の設問に入っていきたいと思います。もし選択肢の中に当てはまる選択肢がない場合には、「その他」を選んでいただいて、さらにコメントをお寄せいただければと思います。

では、設問1「研究室を選ぶにあたり、何を一番参考にしましたか?」。1番が「研究室やPIの知名度・資金力」、2番が「当該研究室メンバーの助言」、3番が「友人や知り合いの研究者の助言」、4番が「ウェブサイト」、5番が「自らの意思(評判に関わらず、自分が良いと思えばいい)」、6番が「その他」となっています。「自らの意思」が一番多いですね。それ以外で「研究室やPIの知名度・資金力」という項目になっています。意外と「ウェブサイト」というのは少ないような感じがします。では、パネリストの加納先生、こちらの結果についてはいかがですか。

○加納 私、これはすごく意外というか、今どきの若者はウェブサイトというのがすごく重要な情報だと思うのですが、なぜこんなに少ないのかが、たった3人ですか、この中で。ちょっと理解に苦しむのですが。ラボのホームページって、本当にPIの、その一番トップの人の気持ちが表れると私は思うのです。本当にそっけないラボのホームページを見ると、メンバーのことをどう思っているのかなと思ってしまいます。3年前の集合写真を載せたままとか、それはちょっと、私からすると愛情があるのかなと疑ってしまうのです。それと、せめて年1回ちゃんと集合写真ぐらい載せて、そういうことがきっちりしているラボというのは差がすごく見られると思うのです。それを参考にしないというのは、私は残念ですね。

○司会 なるほど。今回、何を一番参考にしましたかということで、もちろんウェブサイトも見たうえで、さらに助言、あるいは研究室やPIの知名度、先生の名前を見てこの研究室に行きたいというのが多いような気がします。今、加納先生がおっしゃるように、実際に研究室のウェブサイトを忙しくてなかなか更新できていない先生方も多くいらっしゃると思いますが、研究内容であるとか、その思いがいろいろと込められているので、そういうことも参考にされるとよいと思います。「ラボにホームページがあるのですね」というコメントもありますね。

○加納 そうです、卒研生とか知らない人が多いですよ。ラボに所属してからようやくラボのホームページがあることを知る人が多くて、今どきビックリです。

○司会 そうですね、情報を得るところという意味では、皆さんケータイを常に意識していらっしゃるような気もするのですが。「webはウソ、大袈裟なことが多い。カッコいいことしか書かない」。なるほど、PRという意味ではおそらく書いていらっしゃると思うのですが、あまりマイナスなことはウェブサイトには確かに書かれていない。

○加納 確かにいいことばかり書くことはありますけれども、それを見たうえでラボを訪問するといいいのではないですか。

○司会 そうですね、参考にしたうえでラボ訪問して現実的なところを聞いていただければと思います。ありがとうございます。

それでは、次に設問 2 に移りたいと思います。「研究室を移る際、研究対象や手技が変わることをどう思いますか?」。1 番は「業績がでるまでに時間がかかるから、なるべく避けたい」、2 番が「時間がかかるが、多くのことを学びたいので率先して変えたい」、3 番が「PI の方針なので、嫌でも従う」、4 番が「何も考えず、流れのまま身を委ねる」、5 番が「PI の方針に従わず、自らのテーマで大発見を見て見返したい」、6 番が「その他」。皆さん結構積極的に「時間がかかるが、多くのことを学びたいので率先して変えたい」という回答が一番多いのですが、その一方で半分以下ですけれども、「業績がでるまでに時間がかかるから、なるべく避けたい」という本音も見られているようです。鈴木先生、こちらの結果についていかがでしょうか。

○鈴木 たぶんこれは、若い人は 2 番を選ぶ傾向があるのではないかと考えていました。やはり歳を重ねていくと、だんだん 1 番に近づいていくのかなというふうに、おそらく学生と、ポスドク・助教の non-PI の先生方の分かれ方がここを表しているのかなと考えています。でも、1 番と 2 番があって、そのほかが少なく、5 番はちょっと挑戦的ですが、こういう方がいてもそれを寛容に受け入れるような研究室があってもいいのかなと思いますね。それは僕たち PI がそれを認めるか認めないかにもよりますし、そういう考えが大事かなと思いました。でも、この多くの「率先して変えたい」を選んだ方が、変えてからの 1 年後 2 年後にそれが成果として出てこなかったときに後悔しないということがとても大事だと思います。それを選ぶ自分の意思がとても大事で、僕はこういうことは非常にいいことだと思います。率先していろいろなものを学んで、自分で身に付け、将来のビジョンを持って小さいことでもいいからどんどん変えていく。それらを全部吸収して行って、自分の力として蓄えて、将来大きく花を咲かせてほしいなど、このアンケートを見て思いました。

○司会 ありがとうございます。31 番のコメントに「ある程度やってきたことは活かしたい。」ということで、もちろんその後発展させたいという気持ちもあると思うのですが、これまでの強みを使っていきたいというようなコメントも寄せられていると思います。

それでは、次の設問に移りたいと思います。設問 3「あなたは今の研究室を選んで、満足していますか?」。1 番「満足している」、2 番「研究は充実しているが研究室での生活には不満あり」、3 番「研究は充実していないが研究室生活は充実している」、4 番「選んだことを後悔している」。会場の多くの方々が満足していらっしゃる状況ですが、その中で不満を持たれている方は研究室生活のほうに不満がある。一方で「研究は充実していないが研究室生活は充実している」が 19 名、さらには「選んだことを後悔している」方が 14 名いらっしゃるようです。

では、具体的にその内容について見ていきたいと思います。次の設問 4、先ほどの設問 3 で「満足している」以外を選択された方は具体的にどのような不満を持たれているのでしょうか。複数回答可です。1 番「やりたい研究ができない」、2 番「研究や実験指導をしてもらえない」、3 番「ハードワークを強要される」、4 番「PI (先輩) が威圧的で意見が言いにくい」、5 番「サイエンスをやる雰囲気がない」、6 番「その他」です。これについてはかなり複数の回答が入っているような気がしますね。今のところ「研究や実験指導をしてもらえない」がトップで、「その他」も多いですね。不満の原因はたぶんコメントを見ていったほうがいいと思います。石谷先生、この結果についてどうお考えですか。

○石谷 まず、設問 3 番で「選んだことを後悔している」というのが 14 人もいるのがかなり衝撃で、つらいなと思います。僕が気になるのは、本当にラボの周りの人とか PI の人たちは本当につらいのを

わかっているのかな。どうしてそうなっちゃったのかを知っているのかなということが気になりますね。PIも責任があると思うので、ぜひPIからもできるだけみんなに目を配って、本当にそういう後悔を持っていてどんな理由で不満なのかを知る努力をしてほしいと思いますし、その後悔している方もぜひ周りの人とか、できたらPIにも相談して、「ちょっと僕は不満だ」と言ってほしいですね。さっき、ラボを変えて後悔しているというコメントがあったと思いますが、後悔しているのだったら、ぜひアピールしてほしいなと思います。次の5番の「サイエンスをやる雰囲気がない」、これが多いのはかなり衝撃的で、これはどうしようもないと思うので、ぜひサイエンスをやりたい人は、自分に合う研究室を、自分が楽しみたいと思うのだったらサイエンスができるところを探していったらいいんじゃないかなと思います。あと、「やりたい研究ができない」とか「ハードワークを強要される」、これは少し難しい問題かなと思っていて、もしかしたら本当にヤバい研究室なのかもしれないですけど、もしかしたら逆にその人のことを思って、こうしたほうがいいのか、こういう方針のほうがいいのかPIが考えてやっている可能性があると思います。僕自身もそういうことを感じた経験があるのですが、あとになったら、これはすごく思いやりのある指導方針だったんだなと気づくこともあって。こういうことはPIとぜひじっくり話してほしいし、これは変じゃないかと聞いてほしいですね。2人きりで話してわからないときは、自分が信頼できるいろいろな人に相談して、「これ、どう思いますか？」と、隣の研究室でもいいし、先輩でもいいし、これについて本当にいいかどうかディスカッションしてほしい。それで自分の回答を見つけてほしいなと僕は思います。

○司会 ありがとうございます。木村先生、どうぞ。

○木村 胡桃坂さんとはちょっと違うコメントかもしれないので申し訳ないのですが、さっきのアンケート結果はすごく健全だと私は思いましたし、研究室を移ったほうがいいというのもそのとおりで、やっぱり学会に来ている人のアンケート結果だということがたぶんあるのですよ。だから、この不満の意見が少ないのだけでも、本当はもっとすごく多いのではないかというのが現状としてはきっとあると思います。さきほど、ホームページについても議論がありましたが、役に立たない情報が結構多いのですよ、日本の研究室のホームページって。外国のホームページを見ると、情報として役に立つというのが多かったり、あるいはPIの考えがすごく述べられているホームページも結構あるので、そういう有用な情報を発信できるようにするというのが我々の責任で、ミスマッチ的なことをできるだけ少なくするというのが大事なんじゃないかなと思います。

○司会 先ほどのコメントの中にも、この学会に来ている時点で結構いいじゃないか、というようなコメントもあったと思います。ほかにいかがでしょうか、加納先生、何かありますでしょうか。

○加納 先ほどのウェブの話と関連するのですが、ウェブだけ見てくるとか、研究室を選ぶときに最近よくあるのがワードだけで行く人がいるのですね。「がん」とか「再生」とか、そういう言葉だけで私はこれがやりたいのでそこに行きますというみたいな、単純に行ってしまう人が後を絶たないんですけど、そうではなくて、その研究室で具体的にどういうことができるかという、ちゃんとPIの先生と研究室に行くまでにしっかりお話しして、さらにPIの先生と自分の相性がどうかということもしっかりお話しして、そのうえでちゃんと決めていただければ、その1番の「やりたい研究ができない」という

事態はあまり、そんなには起こらないんじゃないかなと私は思います。もちろん稀には起こるかもしれないですけど。お話ししたうえで研究室はちゃんと選んでほしいなと思います。

○司会 ありがとうございます。コメントも続々と寄せられています。「PI が論文を読まないの、サイエンスな議論ができない。言うことがいつもコロコロ変わるのはいんどい」というコメントも出てきますので、皆さん読んでいただければと思います。「任されたと思ってやったら勝手にやったと言われ、一つ一つ確認すると自分で考えろと言われます。」、なかなかこの辺は PI の言葉と認識の違いが出てしまっております。

では、次の設問に移っていきましょう。設問 5 です。これは練習設問でお答えいただいた属性の設問からお答えいただいております。カテゴリーごとに、最初に学部学生の方が出ていますが、それぞれで「あなたは土曜日または日曜日（どちらかでも）ほぼ毎週研究室に行っていますか？」という設問です。アンケートのクリックをお願いします。学部学生の方の時点で既に土日、毎週どちらかに行っている人が大半というか、過半数を占めていますね。どんどんカテゴリーを見ていきましょう。次に修士課程の方、やはり「はい」のほうが多いですね。ですので、学生さんはほぼ毎週末研究室に行っている。次の博士課程も、学部学生、修士、博士と変わらず同じような割合で、結構来られている方が多いという印象ですね。ポスドク、助教、講師、准教授、研究員さん、非 PI 職の方々もかなり多く出ています。junior PI になっても多くが土日、週末に来られている。最後、PI 職の方々ですが、やはり来られている方のほうが多いという結果になっています。何かコメントがございますか、木村先生、いかがでしょうか。

○木村 これは実は今すごくセンシティブな問題で、働き方改革というのができて、所属機関にもよると思いますが、土日に働くというのがすごく厳しくなっています。要するに、届出を出して承認を得ないと本当は土日に働けない。うちの大学ではそうなんです。学部生とか大学院生はその限りじゃないです、働いていないので。だから大学院生は来れるんですよ。来れるんだけど、教員はそういう縛りがある。学部生だけ来て実験をするというのが推奨されるかというのと、全く推奨されないのですね。誰か見ていないといけないというので、この設問への回答でも教員たちは「土日来ています」と言っていますけど、それ、働き方改革の法律にどう則っているのかというのはちょっと微妙な問題があります。ですので、少なくとも今の時点でこの法律自体がどうなのかというのはもちろんあるのですが、あまり土日に来るのは推奨されないという現状になっています。それで土日に強制されて来るというのはちょっと、私から言うと、もってのほかというか、教員は土日に仕事をするのだったらほかの日は休まないといけなくなっているというのが現状ですね。なので、もしすごく困っている学生とかがいたら、「それは働き方改革に反しているんじゃないですか」と言ってみるのがいいかもしれない。そう言うと怒られちゃうかな。

○司会 そうですね、実際に企業の方は「いいえ」という方が多いので、働き方改革という点では企業と大学との認識が全く違うということも表しているかと思えます。來生先生、いかがですか。

○來生 今、木村先生がおっしゃったように、企業ではもちろん研究者であると同時に会社員であるということで 36 協定がございまして、1 週間の中でも 40 時間働きますということで、土日働くとなったときには時間外労働になります。私がアカデミアから移って最初のカルチャーショックは、土日に働いては駄目ですよと言われたのが、当時ビックリしました。例えば土日出てこられても 3 日間、どうして

も研究の都合上出てこなければいけないときは4日間になることはあるのですが、そのときには次の月に振替の代休を取るよとということがありまして、アカデミアとは現時点では結構違うと思いました。先生方は働き方改革というところで、そのような流れになってきているのかなというところはあると思います。ただ（企業においても）、どうしても研究をやらなければいけないときもあります、そのときには代わりの、例えば委託をすとか、自動化のロボットを使うとか、実際に人が働かなくても済むような手立てというところに力を入れているというところもあるかと思ひます。

○司会 ありがとうございます。では、これと併せて次の設問6に移っていきたく思ひます。設問6「夜間土日祝日の研究は、実験内容や状況が差し迫っている場合は、やるべきだと思ひますか?」。1番「やるべき」、2番「やる必要はない」。いかがでしょうか。そうですね、既に来られている方が多いので、差し迫っている場合は絶対来るといふような状況なのだと思います。先ほどコメントの中に「休日は機器が空いているのでありがたい」とか「…細胞があるから土日は1時間だけ行きます。」というよな、実験の内容に応じた理由で来るといふ方もいらっしやいます。あとは「土日は家事、育児があるので、休めません」といふよなコメントもありました。それぞれの立場に応じた働き方を何とか遂行しているという様子がかえると思ひます。ありがとうございます。

では、次に設問7と8に移っていきたく思ひます。設問7、PI職・junior PI職以外の方に、ご自身の研究室の「PIを見ていて、大変だなあと思ひますか?」。一応「はい」といふ方が多いですけども、「いいえ」の方も16名いらっしやいます。

続いて、これをPI側から見ていきたく思ひます。設問8、今こちらの会場にいらっしやるPI職・junior PI職の方、ご自身が「PIになって、大変だなあと思ひますか?」。「はい」が多いのですが、意外と「いいえ」も多いですね。これはうらやましいといふか、そういう感想ですけども。

今の設問8で「はい」と答えられたPIの方々にお伺ひしたいと思ひます。設問9「何が一番大変ですか?」。1番「多忙による研究室メンバーと接する時間の少なさ」、2番「学生のモチベーションを上げるための努力」、3番「大学院（博士課程）進学率の低下」、4番「研究費の維持」、5番「その他」。いかがでしょうか。「研究費の維持」が最も切実な問題として挙がってきておりますが、2番目に多いのが「多忙による研究室メンバーと接する時間の少なさ」、忙しすぎてメンバーとなかなか話す時間がない。さらには「学生のモチベーションを上げるための努力」といふふうになんkingされています。この結果を見ましていかがでしょうか。木村先生、何かご意見、ご自身の立場と比較していかがですか。

○木村 これはずっと前から言われているとおり、多忙化といふのが問題になっていて、昔はといふ、昔話をしてもしょうがないんですけども、先生が結構楽しそうにやっているといふのがあったと思ひますよ。でも最近先生が苦しそうといふのが結構あったりして、あまりそれはよろしくないなと思ひています。だから、多忙なだけけれども、きちんとディスカッションする、サイエンスの議論をする、あるいは指導するといふのがすごく大事で、結果的に土日来てひそかに頑張るとか、夜遅くに自分の仕事をするといふことが、きっと多くのPIの状況かなと思ひますね。なので、温かく見守ってほしいなと。

○司会 ほかにございますか。來生先生、何かコメントございますか。

○來生 振り返ってみると、若い学生さんとか修士、ポスドクの方とか、やはり研究が好きでこの道に進んでいる人がほとんどだと思いますので、その研究ができるということ自体が幸せなんだろうと思いますが、企業に行きますと、もちろんたまたまやったプロジェクトが好きな研究であることもあるのですが、自由に研究ができる環境ではないこともあります。そう考えると、やはり好きな研究ができるアカデミアの環境というのは素晴らしいところであって、そこで PI になれて、いざ自分の研究ができる、そこに進むことができるようになったところで、多忙によって本来やりたかったことができないという環境になっているというのはよく聞きますし、できるだけそうであってはいけないのかなと思っています。ですので、ぜひ先生方も、ということで、もしそのところでいろいろな課題があるのであれば、そういうところを変えていくような仕組みをつくっていくことが必要かなと思います。

○司会 ありがとうございます。先ほどクローズアップされた「…会議をサボって楽しそうに学生と実験しています。」。おそらくこれが理想というか。ただ、これができるかどうかは、PI の度胸にも懸かっているような気はしますので、そのレベルまで到達したらおそらくハッピーな PI 生活が待っていると思います。いろいろとコメントが寄せられています。「ひさびさに実験した PI が「やっぱ実験は楽しいね!!」と満面の笑みで言っていて、研究以外の仕事だらけなんだな…」というふうに学生さんなどのメンバーの方が見ていらっしゃるような気がします。

○鈴木 おそらく先ほどの土日の働き方でもそうなんですけど、たぶんここにいる僕たちとかは研究に対してのスタンスというか、研究が趣味なんですという方が土日も趣味でやる。しかも、僕は学生のときも趣味だと思っていて、ただで趣味ができる、しかもクーラーが効いている、インターネットもつながる。全部ただというのがすごく自分としてはよかったというのがあって。最近では、僕たちもそうですが、研究を仕事と呼ぶ。仕事ができたとか、仕事がまとまったとか。仕事という言葉が先行してしまうと、研究を仕事としてやらざるを得ないというのが学生にも浸透してしまって、これをいつまでにやらないといけないとか、仕事をやっている感覚になる。お金を払って仕事をする。そんなことなら来たくないと本当に思うのですね。これを趣味として研究するというのを強要することもできないですから、やはりその人の個性というか個人の立場を考えていかないといけないのかなと思って聞いていました。

○司会 ほかに何かコメントがありましたら、パネリストの先生方からお願いします。私自身も大学院で実験をしていて、それが当たり前の、無償というか、普通に学費を払ってやっていたのが、研究員になったら全く同じことをやっているのに給料をもらえるようになったという感覚がすごく不思議というか、ある意味趣味の延長のような感じで、そういう意味では実験、研究が楽しいというふうに続けられるのがベストなのかなという気がします。

○木村 会場からのコメントにもあったのですが、それは私が最初に言っていたように、ここに来ている学生さんたち、あるいは PI の方々みんな頑張っているけども、研究室選んで楽しんでいることがあまりなかったのですよ。でも、うちの大学で4年生になるときに研究室選びをするファクターで結構重要なのが「あの研究室は楽」というのが、うわさでは実は一番大きなファクターであったりするのですよ。なんでそうなるかということ、やっぱり振り返ってみると大学時代の教育、それから研究に対する捉え方あるいは学問をするというところ自体がすごく弱くなっている。研究室に入って、研究が楽しい、あるいは最初からモチベーションがあるという学生は、研究に対してモチベーションがあると

研究室を楽しみに来るかもしれないけれども、どうも研究室へ入るまでの間に学部生のときに学力も低下し、モチベーションも低下してしまうというのが今の大学の、うちの大学だけかもしれないですけども、問題かもしれないけど、そういうことを何とかしようよということにかかる労力は実は結構あります。コメントにもあったように、やる気のない学生が来たときに、取られるエネルギーはすごくかかるわけですよね。そういうのが蓄積していくと結構大変ということで、大学自体の構造的な問題というのものもあるのではないかなと思っています。とはいえ、やっぱり私、大学が好きなのは学生が来てターンオーバーがあって、研究所で本当に研究員だけでやっているとどんどんマンネリ化してくるというのがあるから、それはすごくいいので、それを生かしつつ、もっと教育・研究をちゃんと考えていかなければいけないのかなという、とりとめのない話ですみません。

○司会 ありがとうございます。167 番「研究以外のしごとが多すぎそうに見えて、研究続けて目指してるのこれなのか〜と思って悩んでしまうときも…」というコメントがあります。おそらく皆さんの研究室の先生方は忙しいけど、サイエンスを話したがつているというのが実情だと思いますので、できるだけ捕まえてディスカッションをするというのが一つ重要だと思います。先ほどコメントにもありましたが、ここの学会に来られている学生さんは先生方が送り出した、発表して来いと言われた学生さんがほとんどなので、たぶんモチベーションも高いですし、研究室でも高いところを目指していると思うのです。その一方で、たぶん研究室を学部学生の段階で選ぶときにもう少し楽にできるんじゃないかというふうな、そこら辺の温度差をどうやって研究室の中で理解して、それぞれの良いところを目指していくというのも大事なかなという気がいたします。「「楽で就活しやすい」を基準に研究室を選ぶ人けっこういますよね。その研究室の PI はかわいそう。」というふうな、「楽さで選ぶ人が大半でした」というようなコメントが多々寄せられています。「自腹で学会行ってた」という方もいらっしゃいますので、でも発表したいという意思があつて来られるという方がいるんだと思います。

では、次に移っていききたいと思います。最後のカテゴリーになります。設問 10、これは PI 職・ junior PI 職以外の方に聞きたいのですが、「ポストとのコミュニケーション（研究以外の雑談や、食事を一緒に取るなど）は重要と思いますか？」。1 番「重要」、2 番「ある程度必要」、3 番「全く必要ない」ということで、一番多いのが「ある程度必要」。しょっちゅうは困るというか、あれですけど、「重要」という方も 48 名いらっしゃいます。中には「全く必要ない」という方が 6 名いらっしゃいます。石谷先生、いかがでしょうか。

○石谷 「全く必要ない」という方がどう思われているのかすごく気になりますが、僕自身はコミュニケーションがすごく大事だなと思っています。PI にとって研究室にいるメンバーというのは自分と同じ目標を持ってくれる仲間ですし、彼らがどういうふうに向かっているのか、どういう研究を進めていきたいか、将来どうなりたいかというのはある程度コミュニケーションを取って理解し合わない、それに沿った指導というか、指導という言い方もよくないかもしれませんが、バックアップができないのではないかなと思います。全くのディスコミュニケーションだと、完全に分断されてしまって支援もできなくなるので、一緒に目標を持ってくれているスタッフや学生たちを育てる、応援する責任が僕らにはあると思うので、ぜひ PI から、あるいは学生や non-PI の人たちからもコミュニケーションを取っていただきたい。食事とか飲み会というのはお話しするチャンスだと思いますし、普段お茶を飲んでいるときとか廊下で会ったときにパツと話すのもいいと思うので、コミュニケーションを取り合って、個性とか希望とか将来のこと、お互いのいろいろなことを話すのが大事だと思います。

○司会 ありがとうございます。「先生との呑み会楽しいです!」というコメントが先ほどクローズアップされました。おそらく昼間はほとんどバタバタしている先生で、いざ飲み会となるとそっちのスイッチをオンにしてディスカッションしたり、とりとめのない話ができるということもあるので、学生さんもそういう飲み会にはぜひ参加していただければと思います。中には「PIに挨拶をしても無視されるので話す機会がない」。これはちょっと何かのあれがあると思いますので、まわりに話すか、研究室を変えることを検討したほうがいいかもしれないですね。「楽」の定義にもよりますね。体力的にきつくと精神的には「楽」に、のびのびと研究をさせてあげられるようにするのがPIの役割です。実験をしなればいけないけれども、精神的に楽しくてやりたい研究であれば、そういったものを伸ばしていければというように。「普段からディスカッションしやすい雰囲気を作ることはとても大事だと思います」というコメントもいただいております。「ボスの話を延々聞かされる時間を、ボスはコミュニケーションと思っている可能性がある。」、これは逆にコミュニケーション大好きな先生で、なおかついろいろ話したがるの先生なので、そこら辺は実験があるときはたぶんうまく区切ってというふうな感じだと思うのですが。たくさんコメントをありがとうございます。

では、最後の設問に移ります。設問11「研究室のメンバーとはどう付き合いますか?」。1番「友達になってプライベートでも仲良くしたい」、2番「研究室の中だけで仲良くできればよい」、3番「実験ができる人とは仲良くするが、そうでない人とは社交辞令程度」、4番「実験に必要なことは話す、極力話はしないようにする」、5番「盛り上げ役として、みんなをまとめた」、6番「その他」。なるほど、そうですね、一番多いのが「研究室の中だけで仲良くできればよい」という、研究室の中でのコミュニケーション。その一方で1番の「友達になってプライベートでも仲良くしたい」、特に学生さんの場合には、もちろん研究室でもそうですし、研究室外で会うことも多いと思うので、できるだけ仲良くしたいというコメントもありますが、少数派ですけれども4番「実験に必要なことは話す、極力話はしないようにする」という方が3名いらっしゃいます。3番「実験ができる人とは仲良くするが、そうでない人とは社交辞令程度」、実験のできるレベルによってどうやって接するかという、かなり辛辣な選択肢を選ばれている方もいらっしゃいます。中には5番「盛り上げ役として、みんなをまとめた」という方もいらっしゃるようです。「その他」が5名いらっしゃいますが、鈴木先生、いかがですかね、この結果を見まして。

○鈴木 そうですね、まずは少し安心したというのが正直なところですが、研究室というのはPIとの関係も大事だと思うのですが、やはり一番話すのは同志というか、仲間、先輩、後輩だと思います。僕もそういう場面で非常に多くのことを学びましたし、時にはぶつかることもありました。サイエンスのこともそうですし、葛藤というか、そういうものもできるという意味で、そういう研究室を選ぶわけではなくて、そういう研究室を自分でつくっていくという考えも大事かなと、この設問で思っています。ちょっと安心したのは、やっぱり研究室を盛り上げていくという人が結構いるということは、研究だけではなくて雰囲気をつくっていくというのも若い人にはそういう人もいます。みんなと仲良くしながら研究をする。研究は結局一人でやることはそうかもしれないですけども、やはり助け合っていく。特に最近共同研究等々非常に多くなってきて、それが当たり前の世界ですので、そういうものを研究室の中でもして、それがさらに広がって、将来的に研究室間で同志が広がっていったときにもそういったコミュニケーションをつくりながら、活躍してほしいなと思いました。

○木村 ちょっと私は違っていてというか、結構仲良くやらなければいけないと思うとすごく無理がたたるとか、すごく気を使って、みんなの雰囲気悪くしないようにと気を使いすぎる人が意外と多いんじゃないかなと思うのですよ。でも、そんなに気を使わなくてもいいんじゃないかというのが私の考えで、やっぱりサイエンスの何がいいかというと、相手が好きでも嫌いでも先輩でも後輩でも先生でも、サイエンスの土台で自由にしゃべれる、そこで議論できるというところだと思うのです。だから、そこで好きな人の意見はやっぱりサポートしたいと思うかもしれないですけども、そうじゃなくて嫌いな人の意見だって、よければ受け入れるという、サイエンティフィックなディスカッションのトレーニングが研究室ではすごく大事だと思うのですよ。だから、そんなに無理してみんな仲良くしなくても、もちろん積極的にギスギスする必要はないというか。合わなくても議論ができるというのがサイエンスのいいところだなというのを感じてほしいと思っています。

○加納 さきほどコメントであったのですが、最近、セクハラだのアカハラだのというのがすごく重く押し掛かっている、例えば男同士、女同士で飲み会に行くのはいいかもしれないですけど、男性 PI が女子学生を1人誘って食事に行くというのは今たぶんアウトなんですよ。だから、仲良くしたくてもなかなかできにくい世の中になっているのが私は悲しいです。

○司会 そうですね、おそらく我々が学生だった頃と比べたら、先生との付き合い方が変わってしまっているところも出てくるような気はします。先ほどのコメントの中で「30歳代以下限定の教員&院生の飲み会がある。もちろんPIにはナイショ…」、この教員の中にPIが入っていないということですね、「話の内容は擦して知るべし」。おそらくその研究室のPIの先生の文句を言いながら飲むというのも、ある意味健全な研究室生活。PIの先生方、完璧な方はなかなか少ないかと思しますので、むしろちょっとサイエンスに対する情熱が強すぎてみたい、でもこういうところはというような、研究室の中でそういうことも話し合えるような雰囲気がよいのかなという気がいたします。ほかの先生方はいかがですか。今のことも含めまして、全体を通して気になったコメントがあればお願いいたします。

○來生 その研究室のメンバーは、例えば大学院を卒業して何年も経って、結構上の先生なんかはよく経験されていると思いますが、世界は狭いなとか、例えば海外の知り合いの先生であつてもずいぶん経ってからまた一緒に仕事をするようになったりすることもあります。ですので、研究室で一緒になった人たちというのは、もちろん打算的に付き合う必要はないと思うのですが、狭い世界なのでしっかりとお互いにリスペクトして、いいコミュニケーションを取るといことは大事なのかなとは思いますが。もちろん研究の世界に行って、自分も若いときは自分さえ成果を出せばいいやみたいな、そういう業績主義的なところもあったのですが、だんだんと外に出たり、いろいろな人とも知り合いになったり、先ほど鈴木先生もおっしゃっていましたが、多くの共同研究とかをする、特に最近では産学連携などもあり、この分野もいろいろな分野の方々とコミュニケーションを取っていくことの必要性に迫られていると思います。そこも一つのスキルとして、せっかくだいい経験なので、そこでいいコミュニケーションを築くことも大事なのかな、学生のときに学ぶことなのかなと思っています。

○司会 ありがとうございます。236番「若い時は、自分がいいと思った研究室を渡り歩きました。意図せず、キャリア形成に意義あったことに、年とってから驚いています。」というコメントもあります。私自身も、大学院やポストクのときの研究室で、そのときはそれなりにというか、もちろんディスカッ

ションしたり、話すことも多かったのですけれども、その研究室を離れても学会とかでまた会ったときにそのときの経験が役立っているということを実感することが多いので、今いる研究室の方々との関係性をよいものに築いていただければ。仲が良ければいいなとまでは言わなくても、ある程度のコミュニケーションが保証されていたほうが、透明性があるといい研究室だと思います。ありがとうございます。

では、そろそろ時間が迫ってきました。いろいろとご意見をいただいたのですが、最後にまとめの意味を込めまして、恒例となりましたが、パネリストの先生方からご提言をいただきたいと思っております。「研究室の選び方」について、それぞれコメントをお願いいたします。

○石谷 今回はアンケートの作成から今日の集計を見ても、めちゃめちゃすごく勉強になりました。PIとしても学びの機会となったと思います。提言というのはちょっとおこがましいのですが、コミュニケーションというのはすごく大事なと今回あらためて思いました。研究室というのはサイエンスをやる集団、いわゆる ONE TEAM として力を一丸としてやっていかないといけないと思います。ディスカッションはギスギスしてもいいので、しっかりコミュニケーションを取ってお互いをわかり合って、みんなでどうしたらいいのかを理解し合ってやっていくのが大事だと思います。研究室っていろいろ個性的なメンバーばかりだと思いますが、そういう人たちとちゃんとコミュニケーションを取ってやっていくのが大事かなと思っています。そうしたことによって、自分にとっていい研究室へ改善していくこともできるのではないかなと思っています。あと、PI側からも全員のメンバーがちゃんとコミュニケーションを取れるようなチャンスをつくってあげるというのはすごく大事だと思います。

○加納 今日の話題は「研究室の選び方」ということで、それに対して思うのは、最初も言ったのですが、若い方とはとにかく研究室を選ぶときはそのPIの方と、最低1時間はおしゃべりしたほうがいいと思います。1時間くらい話せば、とりつくろっている笑顔もだんだん崩れて、本音が出てきたりするので、私は研究室を選ぶ場合はそのPIと1時間はしゃべって決めてほしいなと思っています。

○鈴木 僕も、研究室を選ぶ学生さんの相談を受けてディスカッションするときがあるのですが、僕が言っているのは結局教授だけじゃなくてPIの人は研究大好きな人たちで、さっき言ったように趣味でやってきて、ある意味でオタクみたいな人なので、どこに行ったらみんな同じだからと言っています。自分の研究室に入れようとかは思わない。やはり最後は自分で決めなさいと言っています。先ほど設問にもあったのですが、誰かがこの研究室はいいよとか、この研究室は悪いよというのは、それはその人の経験という側面があるので、おそらく逆の意見も絶対あるはずで、それを偏って思い込んでしまうと、本当はその研究室はすごく良かったかもしれないと後悔することになるかもしれないし、また逆もあるかもしれない。結局それを後悔するも何も、自分が自分の意思で決めたということが最後になって責任となり、自分がそのあとどうするのか、この研究室を移るのか、そこで頑張るのかというのを自分自身で考えることができるので、僕たちも責任を放棄するわけではないのですが、研究室を選ぶ立場の方々は自分の意思を最優先して、研究室を選ぶことが大事だと思います。どこに行ったらいいこともあれば悪いこともあるんだと思います。どんな有名なラボでもですね。そこを考えて研究室を決めていってほしいなと思いました。

○來生 「研究室の選び方」に関してコメントさせていただきますと、私もやはり好きな研究がやりたいというところで、そのラボの業績とかそういうところはあまり考えずにやってきたように思います。

結果としてやはり自分がやりたいことがやれる、そういう環境にいられたということは今でも幸せだと思っていますし、研究室選んでそういうところがまず一番大事なところではないかなと思います。一方で、日本に行って海外に行くと全部で5箇所ぐらい変わっているのですが、そのたびに自分自身の視野も広がっていくところもありますので、もしチャンスがあつて外に出ることもあるのだつたら、そういうところにも視野を向けることも良いのではないかなと思います。研究をやっていると限られたところで視野が狭くなってしまうところもあると思いますが、例えばお正月に1日とか、自分は本当に何をやりたいのかなというところも考えつつ、そんな中で同じことをできるのだつたら、こっちのほうがいいかなというところも少し考えてみるというのも大事かな。また、特に若手の時代に業績を出すということは現実的にすごく大事なところだと思います。そこでしっかりと業績を出せると、その次の道が開けてくるというところがありますので、そこをしっかりと、世の中と言ったらおかしいですけども、そこも見極めたうえでやるのがいいのかなと個人的には思っています。

○木村 最近研究室を移るといのはそんなに難しくないと思いますね。情報もいっぱいある。学部で入ったらマスターで移る。マスターの人はドクターで移る。何回もチャンスがあると思います。だから、今の自分の研究室に何か物足りなさであるとか、居づらさ、あるいは研究内容と自分の興味とのマッチング、あるいは教授との何かキャラの違いみたいなことも含めて、今よりもいい環境があると思うのだつたら移るといことをちゃんと積極的に考えるのがいいかなと思います。ただ、先ほどから言っているようにラボ内のコミュニケーションはやっぱり重要で、コメントにもありましたが、リスペクトというのは最も重要だと思います。その中でサイエンスの議論を真摯にやっていけば、何かお互いわかり合えるというか、問題も解決できることもあるかもしれないし、新しいサイエンスのテーマ、疑問が浮かび上がってくるかもしれない。そういうことをラボに入ったらきちんとやって、それで何となくやっぱりここでやってもちょっとつらい、あるいはもっと違うことをやりたいというのであれば、積極的に移っていくという機会が今はたぶんあるので、考えたらいいんじゃないかなと思います。それから、土日の話ですけど、機関によっては土曜日に講義が入っている大学とかもあるんですよ。そういうところはたぶんそれに見合ったシステムになっているはずですよ。だから、どこの大学でも土日は駄目というわけではないのではないかなというふうに思っています。

それから、明日のランチョンセミナーでは、大学院の無償化について議論します。私が座長を務め、マックスプランク・フロリダ研究所から安田涼平先生に来ていただきます。文科省の方もオーディエンスで傍聴しますので、皆さん、ぜひ来てください。

○司会 委員の皆さん、コメントをありがとうございました。今回この「研究室の選び方」というトピックでランチョンセミナーを開催したのですが、研究室のあり方というのはPIによってだいぶ変わってくると思いますので、理想の研究室というのはたぶん1つの正解があるわけではなくて、その研究室なりの運営の仕方があると思います。ただその一方で、コミュニケーション、風通しの良さというのが1つのキーワードになったのではないかなと思います。今日のディスカッションを通しまして、皆さんのこれからの研究室選び、あるいは今いる研究室の中での過ごし方、みんながハッピーになれるような研究室生活を送れるよう、何らかのご参考になれば幸いです。

本日は皆さんからたくさんコメントをいただきましてありがとうございました。ディスカッションの内容は会報の2月号に掲載を予定しています。全文記録は学会ホームページに掲載しますので、そ

らもご覧ください。アンケート用紙は会場の出口で回収しています。本日はどうもありがとうございました。(拍手)

[了]